

Library Sketch



ライブラリー・スケッチ

「ビジュアル資料閲覧室」

ビジュアル資料閲覧室は本館の入館ゲートからまっすぐ入ったところにあります。閲覧室にはいくつかの出版社の文庫本と、図鑑等を含めた大型の写真や絵の入った本がいくつも置いてあります。今回、スケッチの中心として描いたピックアップコーナーと世界の児童文学(和書)は特に私のお勧めのコーナーです。一人暮らし

をしている人に便利な料理本やコーディネート、カフェなどに関する本もあるので、まだ立ち寄ったことがない人は、ぜひビジュアル資料閲覧室へ行ってお気に入りの空間にしてみたいかがでしょうか。

岩本 千鶴 (英米語学科3年次生)

10月のピックアップコーナー

●「印欧語の古いかたち」

照井 菜穂子

ダマヤンティー姫は困ってしまいました。婿選びの儀式で、相思相愛のナラ王を選ぶにも、ナラ王と同じ姿の人間が5人もいるのですから。ひとりが本物、残る4人は彼に変身した神々でした。姫はナラ王を見分けるべく神々に切々と訴え、最後にこう言います。サンスクリット語の原文(『ナラ王物語』5・21)では：

svaṃ caiva rūpaṃ kurvantu
lokapālā maheśvarāḥ
yathāham abhijānīyāṃ
puṇyaślokaṃ narādhipam

「そして、偉大な主である四天王たち(神々)は他ならぬご自身のお姿をなさいませ。わたくしが聞こえ高き人々の王(ナラ王)を見分けることができますように。」

現代英語の遠い祖先である古代の印欧語では、文法上の役割を単語の形を変えて表していました。たとえばrūpamは中性名詞rūpa-「姿」の単数の対格形です。「姿を」という目的語になります。大学で新しくヨーロッパ系の言語を

習い始めたみなさんは、英語になかった格変化や動詞活用にとまどうこともあると思いますが、それらはすべて、遠い古代の人々が話していた古い言葉の名残です。今回のピックアップでは、そうした印欧語の古いかたちをご紹介します。故きを温ねて新しきを知るというわけで、英語の中の「なぜ?」が解けるかもしれませんね。

上記のサンスクリット語原文では、それぞれ次のような格変化・動詞活用をしています。

svam: 形容詞sva-「自らの」の中性単数対格、rūpam: 中性名詞rūpa-「姿」の単数対格、kurvantu kr-「する、作る」の命令形3人称複数、lokapālā(s): 男性名詞loka-pāla-「世界の守護者」の複数主格、maheśvarās: 男性名詞mahā-śvara-「偉大な主」の複数主格、yathā: 接続詞「~であるように」、aham: 人称代名詞1人称単数主格、abhijānīyāṃ: 動詞abhi-jñā-「認識する」の願望法1人称単数、puṇyaślokaṃ: 形容詞puṇya-śloka-「良き聞こえをもつ」の男性単数対格、narādhipam: 男性名詞nara-adhipa-「人々の王」の単数対格

注: 語の結合により音が変わる現象(Sandhi)のため、-mが-ṃと表記され、語末の-sが消失したり-ḥに変わります。ā+īはeになります。

てるい なおこ (情報サービス課)